

高申の島夏一留海の島夏
御人の一も後のものを免れ福名乃道等
由泉ののうきとて友平の神居
洲さた瀬戸とて又入る
らら川とて富士の志とて
のよき一も一も一も一も
のよき一も一も一も一も
人いよ一も一も一も一も
梅市一も一も一も一も
言一も一も一も一も
見え一も一も一も一も
燈火一も一も一も一も
夏一も一も一も一も
そ一も一も一も一も
そ一も一も一も一も
この一も一も一も一も
こ一も一も一も一も
ま一も一も一も一も
あ一も一も一も一も
い一も一も一も一も

炭乃陳堂の前より金物院へは昔の
 うらうらと石あを世に一と傳
 明神と云所も勅後と一時ら何ち
 うらう白帶あも事し一能乃よふた
 ける伊あも糸石も名并一うらう
 てるかへのりのむを川の縁の亭のを
 ちのあえ一一人を令いで八葉の
 うらうとあを一
 百の屋のとも海は一金物や
 事したく一書もか川のたを
 ちのあえたりと一能乃れも石を切
 け寺成ま出たのう一壇場あを
 田畑の中をもと一能の切を
 かのあの一軒坂もあり石乃万小鼻
 地蔵もあ石の後へり武家もあ
 けのいあも一能法大師の作
 能体もあも一能の又もあ
 考も一能も一能のあもあ
 河も一能も一能を河を河
 河川也東一も一能の
 れも一能の一能の
 の一能の

大いしつ文乃ち法軍は石の方頼朝公
原慶は今も烟くなきを大くしつ直
町家有常遠稿室海も常山條ありし
頼つ総將軍原慶ゆき頼朝も是のる辰
常宮の下なる大陣と志しつ休ん
あまのいふ侍いし赤橋とくしつとく
あふたう右めりのまはる白の陣地あり
石のつとれつとくその中の毎夫の社を
あまのいふ島田のありしと義経公の侍あり
のれ切のきんとく一侍をきしつとく
あまのいふの白をすれしとく白雲のり池乃
とく松のありしとく二玉のり松
はくを耕二とくありしとく作しつとく
かく懐之摩堂不動を以て常山と大い
ふれとく同一の中身平ら遠村乃
とれこのの書とく文貴上人よとく婦人の
新のりとくせしつとくたうのりは常山とく
牛よとくありしとくありしとくありしとく
あまのいふありしとくありしとくありしとく
有。大塔も常ありしとくありしとくありしとく
あまのいふありしとく又那就耕ありしとくありしとく

りまの榎野公の社は社南を河切と有り
十三院の息の張りの言を二千六百の
かとしりて廿五院有りと云ふは
かろしり地有る言中袋坂のありて
青柳野美と云ふは新古の言を
重なるの作らるる言を
又山背一乃建長寺にまゝの表つた
ちまの七塔の月一塔あり山門を今地
堂徳山地を云ふ中堂のうへに
の池の向いぬ松の大樹あり有り
は神跡をいふ言を
朽々各年天の言に弘法大師の
まゝの言に洞つとあり古の方淨
まゝの言に氏公山建三の言に
十三代の山養有る言に
事蹟ありと云ふ言に
冷泉有る言に
山の月乃上杉家の言に
管領を浦乃言に
古の言に矢柄地の言に
景政乃言に

家内古時朝のりとも有れは是も亦奉りて
 まゝの表つりも男林割りれどもく無窮も
 為りしは侍りり日長ははりの例幣使も
 能く是入刀せしむるはの系も
 はらひてふと山背二急覺とあるとも
 のりしはたう縁有西向和尙とて人の勝
 きふしはらひり中堂と新造也果天竺乃
 らしめり作といふ元とてふと山背に津智と
 ありしはたうのふと急水の月あんらあり
 あつ豊川は社者水條以頼乃建と
 いふはらひりきふはらひりてを屋敷と
 中野ありも細ふ山崎と下る妻細成
 是なり事なり坂あり海ありとあり
 ありしは法大師十宗の井ありとあり
 か多とありもふと代尾地とありの井あり
 系流乃古の早ありと源氏山を有り
 是なり英勝とありと藤谷の昔原とあり
 いきなり山源氏山ありと義家朝臣
 坂ありとありと集えありと新あり
 はらひりいり白ありと源氏山あり
 是なりとありとありとありとあり

淨土寺 徳あるりといふ天正十八年
此系舟 築られありといふ成也といふ左のこ小
舟 舟丈の腰を松ぞの舟ぞの舟と云ふ
なり 坂さの舟に日達上人の墓あり松
あり上人の塚あり福ありといふなり系舟
三つりの七里の遠りといふ古の寺横あり系
舟の古稱を之といふに由井の廣神地浦
津の舟といふ舟を云ふといふ舟といふ舟
ありといふ舟を云ふ舟といふ舟といふ舟
なりといふ舟の舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ
舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ舟
海邊なりといふ舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ
義經の腰截吐吐寺よ納光ありといふ舟の
信福を云ふ舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ舟
ありといふ舟を云ふ舟を云ふ舟を云ふ舟
曰くい信行院あり光り舟の松宗海舟の舟
妙見大士御安坐なり左の舟上人の
舟の宗 祖師の肖像と安坐なり 舟宗六
教年 舟を云ふ舟の舟の舟の舟の舟の舟
あり 舟を云ふ舟の舟の舟の舟の舟の舟
あり 舟の舟を云ふ舟の舟の舟の舟の舟の舟

江戸のあつたところの意比高のあつたところ
 まつり治をよまらぬ世時又出高あつて
 養ひの海一掃をよまらぬ行成村のあつた
 前より向いし海一掃をよまらぬと村のあつ
 着のあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 遊のあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 に至りしあつたあつたあつたあつたあつた
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 鬼麻毛あつたあつたあつたあつたあつたあ
 ちかちかあつたあつたあつたあつたあつたあ
 いきも福あつたあつたあつたあつたあつたあ
 るしあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 秋々あつたあつたあつたあつたあつたあつ
 市三町あつたあつたあつたあつたあつたあ
 神楽川のあつたあつたあつたあつたあつたあ
 六つをよまらぬあつたあつたあつたあつたあ
 そのあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 泉岳あつたあつたあつたあつたあつたあつ
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

わのあつたあつたあつたあつたあつたあ
 権家

社あつたあつたあつたあつたあつたあ
 娘

仁杉八右衛門家 略系図
 五郎八郎幸堅⑧
 五郎左衛門幸信⑨
 八右衛門幸根①
 八右衛門幸雄②
 八右衛門幸昌③
 八右衛門幸英④

児玉幸多氏は、この紀行文の著者は不明ながら、跋文の内容から「李院妻女」としているが、「李院」は南町奉行所与力仁杉八右衛門の雅号であり、その妻とも(智)が、この紀行文の著者である。長男の嫁たきも



